

歴史探訪



文化振興課 ☎23局 3635
FAX 22局 3811

「常春の里」とお花畑

前号紹介の『半島渥美』の目次で、赤羽根村の「常春の里」という項目に目がとまりました。この「常春の里」では、若戸校区で盛んだった種まきや花つみ、出荷の様子など、花の栽培について記されています。花つみは若い女性の仕事でした。そこには「姉さん達の白い手拭に白のエプロン手甲をつけて、きちんとした身なりで真赤な金仙花畑に立ってゐる様子はほんたうに絵のやうです」と記されています。出荷最盛期



花つみの様子(昭和32年)

の1月のお花畑には、ミツバチが飛び、花を切るハサミの音が響いていました。当時の児童が書いた「常春の里」の情景は、美しい花に包まれた温暖な渥美半島の姿でした。

さて、この「常春」の気候を利用した最初の作物はエンドウで、明治終わりから栽培され、大正10年ころには「渥美絹莢豌豆」の名で全国に知れ渡りました。大江山麓の越戸、土田、和地では特に盛んでしたが、連作ができないため、その間を埋めるため昭和初期から露地の花卉栽培が始まりました。8月下旬に種をまき、最も寒い12月下旬から2月に出荷していました。栽培されていたのは、キンセンカ、ヤグルマギク、ノ

ポリフジ、アブラナなどです。

昭和38年発行の三河湾国定公園のガイドブックにも、大江山麓の「お花畑」が紹介されています。また、渥美半島を訪れた種田山頭火(昭和14年)、寺田透(昭和26年)、井上靖(昭和29年)、武田泰淳(昭和44年)などの文学者たちも、「お花畑」を渥美半島の印象的な景観として、それぞれの作品に記しています。

戦後、観光ブームとマイカーブームに乗り、たくさんのお花に彩られた美しい渥美半島には、多くの観光客が足を運んでいます。そして、昭和36年にフラワーセンターが開園(平



若戸校区のお花畑(昭和52年)

成17年閉園)したのは、渥美半島の観光シンボルが、自然と渥美半島に住む人たちの生業と結びついた景観から人工的な施設へと移っていく象徴的な出来事でした。

渥美半島の初期の花卉栽培は、温暖な気候を利用して、他の生産地の花のない時期を狙って出荷し成功を収めました。この気候をはじめとする風土は、地域の貴重な資源です。それに気づき、いち早く産業と結びつけた先人たちに頭が下がる思いです。

他の地域では、まねをすることの出来ないこの温暖な気候という資源つまり「常春の里」という意味を今一度、見直す必要があるでしょう。(増山)

今月の「表紙」

皆さんはキレイな花を見て、幸せな気分になることはありませんか？ 野山や沿道に咲く花に季節を感じ、元気をもらうことも多い私。咲き誇るコスモスの花に、育てている地域の方の笑顔が重なって見えました。花いっぱい、笑顔いっぱい田原市になったらステキですね。(O)

【表紙の写真】和地校区の「コスモス畑」